

## 「自分なりに考える」

2025・12・17 重枝 一郎

校長研修だより6号（「主体的」とは）において、「主体的」という言葉を定義している。「学びの主体として、学習の対象となる物事に関わっていくこと」とした。また、「主体的」と「自主的」の違いについても書いている。「主体的とは、自分なりの考えをもって、他に対して意志・行動を働きかけることであり、働きかけていないものは自主的になる」と。

実は企業が求める「主体性」は、ここ20年間で変化しているという。以前は「主体性」は「行動する」と結びつけられることが多かったが、今は、「思考力」や「協働性」に結びつけられているという。社会の急速な変化の中では、多様な視点を持った人たちがそれぞれに考え、協働しなければ課題が解決できないからである。今の社会が定義する「主体性」をわかりやすく言うと、まずは「自分なりに考える」ことを起点とし、自分なりに考えたら、必ず「発信する」、さらに「発信」した結果、まわりの人たちと協働することまでをセットで「主体性」と認められる。

私が年度初めのリーフレットで、最初から変えていない部分がある。最上位の教育目標が「自律的学習者」というところである。それは「ひとりにもなれる ひとつにもなれる」というフレーズで「主体性」と「協働性」を置きかえている。だから「大きな物語」としてはこれでいい。ただ「小さな物語」としては、一日の大半を占める授業において「主体性」「協働性」を意識することが重要になる。

「はないち」では当然のように「自分なりに考える ⇒ 発信する ⇒ 課題に対して協働する」という学習プロセスは行われている。教科の授業ではどうだろう。授業の中で、「自分なりに考える」という経験の積み重ねの重要性を意識させてほしい。先に書いたが、「自分なりに考える」ことは「主体性」の起点になるからである。だから授業の中で「自分なりに考える」時間を十分に確保しているだろうかということを意識する必要がある。また、「発信する」ことも重要になる。例えば、ペアで話す、グループで話す、書く活動を入れるなど考えられる。もちろん、当たり前実践している先生も多いと思う。ただ、この「自分なりに考える」「発信する」の積み重ねは、社会に出てから「主体性」を発揮するためのとても大切な準備になっているという背景を認識し実践する。

生徒が自分なりに考えようとするマインドは、どんな時にそうなりやすいだろう。そこには教師の問い方が大きく関係してくると思う。苦手な教科で、「自分なりの考えを持ちなさい」と言っても、そうはならない経験は誰でもあると思う。そんな時、思い出すのは、「ツァイガルニク効果（校長研修だより73）」や「ドリフトする（校長研修だより186）」の内容である。「自分なりに考える」を引き出すための心理的効果がある。

また、生徒にとって、特別活動のグループワークにおいては、その経験を得やすい。私自身、特別活動や部活動で「自分の考えをもって、他者と交流することはとても楽しい」という実感を味わわせ、「学ぶこと自体が楽しい」を感じさせ、その上で「学ぶ内容が楽しい」になるようにしていた。この経験を持って、教科の授業に生かしてもらおうと思っていた。「主体性」を育むということを、先生たちもそれぞれ「自分なりに考える」ことをやってほしい。それが生徒と同様に教師の主体性の育成になる。